

# S. レンツの初期三短篇における Erzählung の構造について

小林 繁 吉

## Erzählungsstrukturanalyse über drei frühe Kurzgeschichten von S. Lenz

Shigekichi KOBAYASHI

ジークフリート・レンツは、1926年 Ostpreußen の Lyck で生まれ、1951年 25歳で最初の長編小説 Roman „Es waren Habichte in der Luft“を出した後、話題作となり、彼の代表作の一つにもなった1968年の Roman „Deutschstunde“までに、様々な作品、例えば、ラジオドラマ (Hörspiel)、長編小説 (Roman)、短編小説 (Erzählung, Kurzgeschichte)<sup>1)</sup>等を書いており<sup>2)</sup>、Hamburg 在住の現代ドイツの最も著名な作家の一人に数えられている。レンツは現代人の孤独の問題を、破滅、保身、罪、責任といった形で描出しており、風刺的まなごしに富んだ時代批判者の眼を持っていて、書くことを作家自身の問いかけとみなし、逃亡、追跡、無関心や冷淡、反抗といった社会的テーマを扱ったものは、語りの才能に満ち満ちていると言われている<sup>3)</sup>。現在も活躍中のこの自由作家 (freier Schriftsteller) の語りの特質を遡ってみるために、特に彼の初期短編を取り上げてみたい。レンツは1958年に短編集 „Jäger des Spotts — Geschichten aus dieser Zeit“を出していて、この中には表題作 „Jäger des Spotts“の他に十二の短編が入っており<sup>4)</sup>、1960年の短編集 „Feuerschiff“と共に初期短編群を形作っている。ここでは、初期短編集 „Jäger des Spotts“から特に三短篇を抜き出して、この現代ドイツ

屈指の物語の名手と言われるレンツの語りについて考えてみたい。

その際、物語を語りとして成立せしめている作品の構造に特に注意を傾け、それを Erzählung の構造として分析し、レンツ文学考察の一助としたい。Erzähler (語り手) と Person (登場人物) と Autor (書き手) の三者を Erzählung において明確に区別する方法もあるが<sup>5)</sup>、ここではこの様な理論的形式にこだわらずに、当該作品である三短篇の Erzählung を成立せしめている作品内の具体的場、状況、つまり、作品の内容、表現における Erzählung の構造分析が論題の中心になる。作品を具体的活性的に分析していくので、当然作品解釈とも直ちにつながっていくのであり、レンツ文学に看取される作品解釈上の曖昧さの理由の一端に触れることにもなっていく。

ところで、文学研究、特に具体的作品分析のために何が有効なものとして想定されるのか、構造主義的な思考法から出発して、この論の前提となる基本的考え方を述べてみたい。まず、一個の (短篇) 作品はそれ自体で独立したものであり、全体で一つの物語を形作っているという、作品の独立性の問題がある。そして次に、作品そのものの独立性の保証になるものとして、物語の一貫性 (細部及び微細部の破綻は別にして)、即ち独立した物語としての作品の組織的全体の統一秩序が作品の自律性として挙げられ、

昭和59年11月6日受理

\* 一般教育部助教